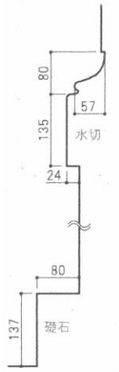
富山市売薬資料館別館　旧密田家土蔵　特別限定公開

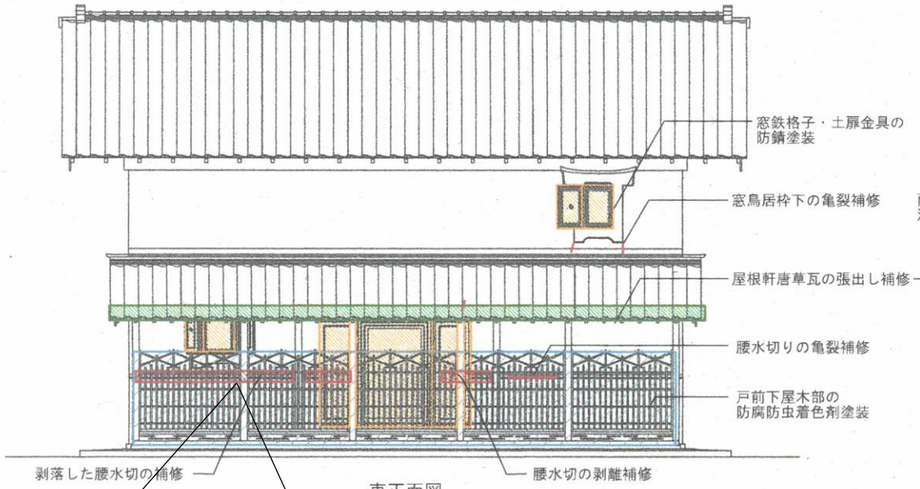
令和６年１０月６日（日）１３：３０～１６：３０

富山市売薬資料館（富山市民俗民芸村）

令和６年１月の能登半島地震で被災した旧密田家土蔵は現在、古来から伝承されてきた技術によって修復作業が行われています。限られた時間ですが、修復過程の一部を本日のみ特別に公開します。

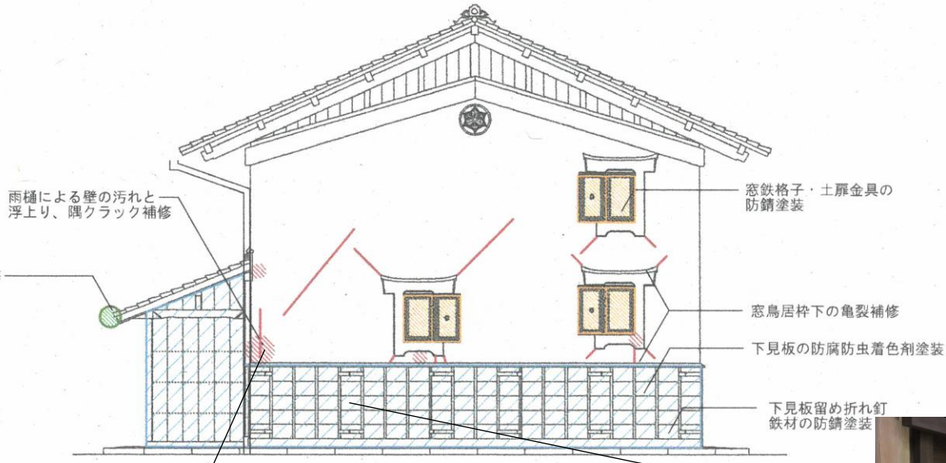


腰水切 断面
詳細図1：10



東正面図

腰水切落下部分の強化（竹釘を刺し、縄巻き割竹を横に乗せて下地とする）

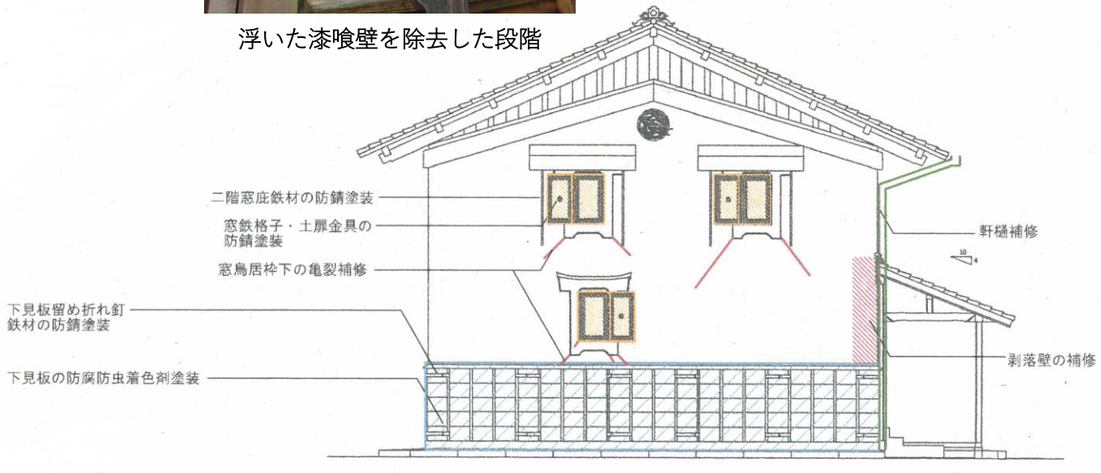


北側面図

浮いた漆喰壁を除去した段階

下見板の防腐防虫着色剤塗布

■凡例
屋根工事　軒草瓦縮直し
軒樋補修
塗装工事　防腐防虫着色塗装
防錆塗装
左官工事　外部 剥離・剥落補修
外部 入口・窓廻り角・腰高水切の
亀裂補修

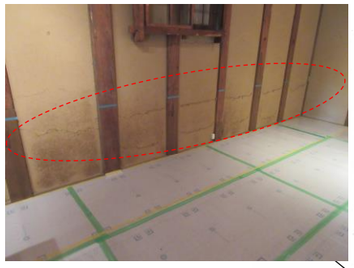


南側面図

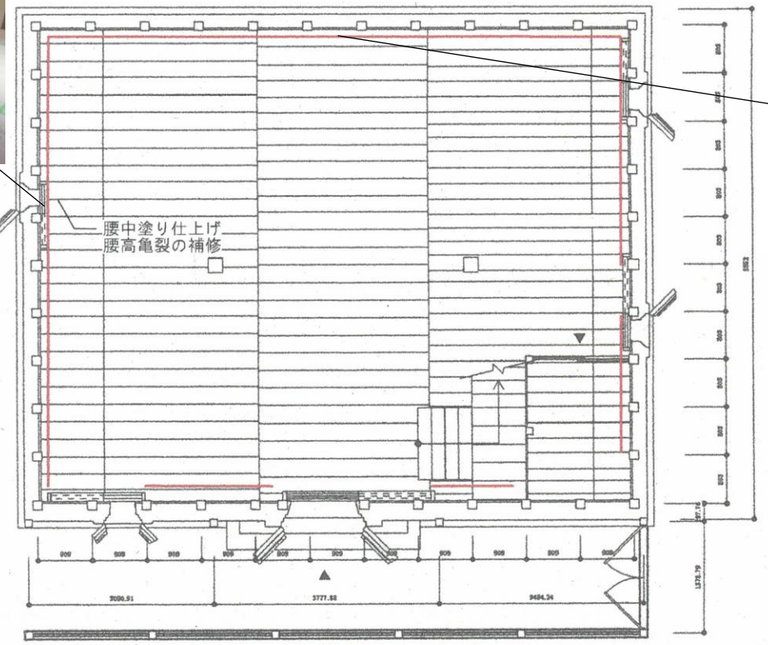
密田家と土蔵

密田家は、江戸時代から「能登屋」と号し、薩摩や紀伊を主な商売先とした、富山を代表する売薬商家でした。商人町の西の一角、富山城外堀を囲む武家屋敷と接した場所にあり、当時の町名は古寺町でしたが、明治３年（1870）に常磐町と改称し、昭和４０年（1965）には現在の荒町に編入されました。

土蔵は、売薬蔵とも呼ばれていたもので、**江戸時代中期頃（約 250 年前）に創建**されたと考えられます。**富山の旧市街地に残った江戸時代の商家としてはほぼ唯一の建物**です。寄附に伴い、平成１０年（1998）から解体調査や復元作業などを経て、平成１３年に売薬資料館の別館として移築、併設されました。土蔵とともに寄附された資料を２階に保管し、１階は企画展等の展示室として活用しています。

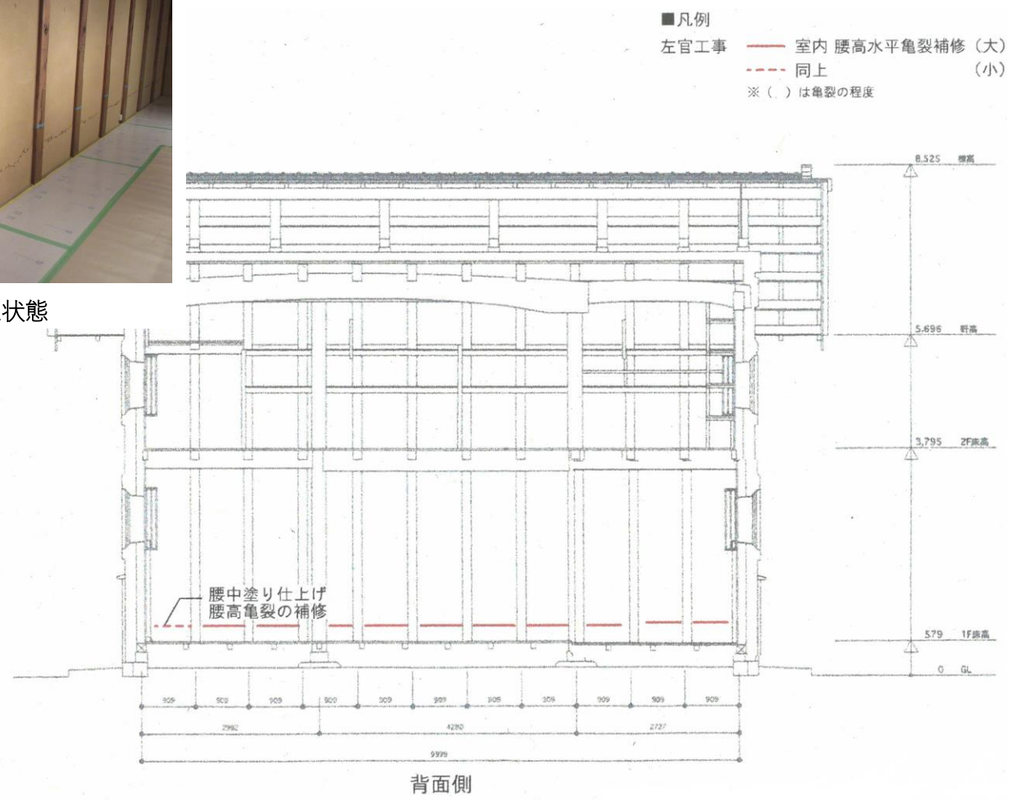


腰高亀裂発生状態



一階平面図

腰高亀裂発生状態



背面側

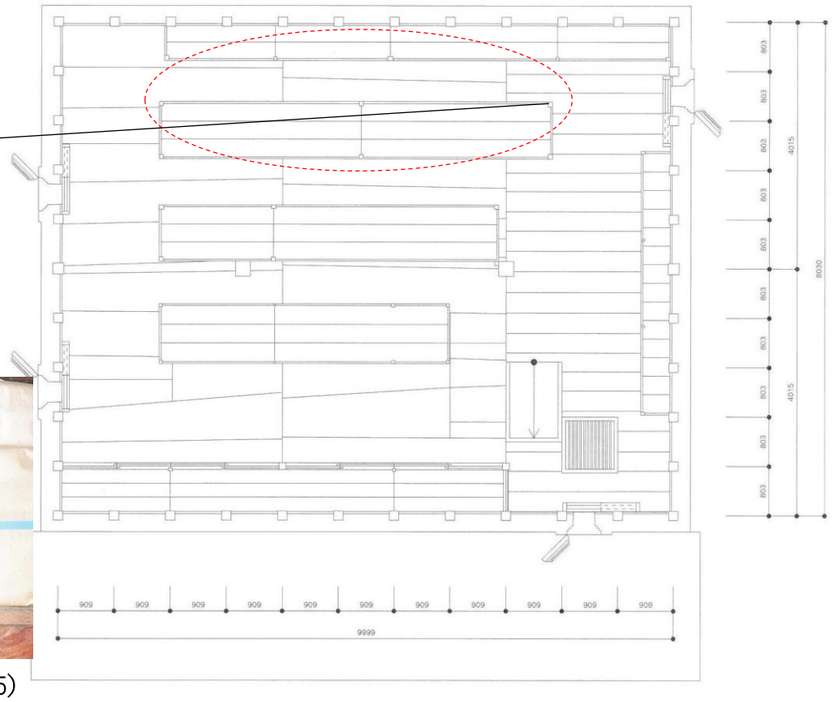
旧密田家土蔵の建築的評価（職藝学院　学院長・教授　上野幸夫氏による）

本土蔵は、建築年代を示す史料を欠きますが、建物内部に残された**安永２年（1773）の墨書や建築様式からみて、この頃よりもやや遡る時期の建物**と考えられます。建物は、桁行五間半（9.999ｍ）、梁間五間（8.030m）、２階建土蔵造、屋根は切妻造桟瓦葺で、平入となります。正面には、梁間一間の戸前庇が付きますが、現在のものは昭和２０年の戦火後に建てられたものです。

県内の土蔵としては規模が大きく、江戸時代中期頃と古い建物で、**数多くの取引や商業に関する墨書が残っており、代々売薬業を営んできた商家の土蔵を知るうえで資料的価値**があります。また、富山の旧市街地にあって、天保２年（1832）、明治１８年（1885）、同３２年の大火災や昭和２０年の富山大空襲と、**たび重なる災害にあいながらも守り残された歴史的価値は多大**です。

能登半島地震による土蔵の壁の主な被災状態（上野幸夫氏の調査による）

出入口正面の左右腰水切台輪の南側が落下し、北側には亀裂が生じました。また、窓や出入口の鳥居枠の左右下角や笠木上角、南面と北面の窓鳥居枠の左右下角や笠木上角にも亀裂が認められます。戸前下屋の渡り廊下の取付きでは、渡り廊下が2cm 沈下したことでコーキングが剥がれ、上部虹梁下の壁板に隙間が生じました。

震災当時（棚の折損、歪み）

安永２年（1773）　天明５年（1785）
２階棚隅柱に残る墨書（一部）